

# 源氏物語「雨夜の品定め」の一解釈

——語り手の立場を考えた場合——

伊 能 健 司

識が多分に表われているのではないかとすることである。本稿ではこれについて論証していくことにする。

## 二

五月雨の続くある夜、源氏が内裏の物忌みに籠っていて、頭中将に女から来た手紙を見せたことから女性についての話になり、折から来合わせた左馬頭、藤式部丞を交えて、論議に花を咲かせることになった。これが「雨夜の品定め」である。結局は理想の妻たるべきものの資格はということに話はすみ、実直、誠実な女性を第一とするような方向へ行くのだった。

「雨夜の品定め」の語られる前の部分を見てみると、

まだ中将などにものしたまひし時は、内裏にのみさぶらひ  
ようしたまひて、大殿には絶え絶えまかでたまふ。

（『日本古典文学全集』120べ）

と語られていたり、

『源氏物語』の「帯木」の巻の半分以上を占める「雨夜の品定め」は、「蜃」の巻の物語論と並んで、『源氏物語』全体における重要性が認められてきた。従来これについて言われてきたことを整理してみると、影響論としては、論議のすすめ方が仏教經典の「三周説法」の影響を受けているという説と、話の根底に唐・六朝文学の影響を考える説がある。物語の中でもつ意味ということ考えた場合、源氏を中の品の女性に結びつけるための、物語の序としての役割をもった女性批評ということで大方向の人々の見解は一致しているようである。私もその考えに特に異存はない。しかし、作者には「雨夜の品定め」を設定するにあたってもう一つ意味する大きなものがあつたと思われる。結論を先に述べるならば、「雨夜の品定め」という女性批評は、源氏に葵の上を再認識させ、源氏と葵の上の夫婦仲を改善しようとする頭中将たちの意

長雨晴れ間なきころ、内裏の御物忌さしつづきて、いとど  
長居さぶらひたまふを、大殿にはおぼつかなくうらめしく思  
したれど…… (130べ)

と語られていたりする。「桐壺」の巻でも、

内裏住みのみ好ましうおぼえたまふ。五六日さぶらひたまひ  
て、大殿に二三日など、絶え絶えにまかてたまへど、ただ今  
は、幼き御ほどに、罪なく思しなして、いとなみかしづきき  
こえたまふ。 (125—126べ)

とあるほどで、源氏と葵の上との関係が不仲とまではいかないが、  
うとうとしものになっていることはたしかである。そして、左  
大臣邸の人々は気がかりで面白くなく思っていることが分かる。  
そういったことが三回も繰り返して強調して語られている。そし  
てそのすぐ後に「雨夜の品定め」があるという状況に注視しなけ  
ればならない。

「雨夜の品定め」については、従来女性批評をする人々の立場  
というのがあまり顧みられてはいなかったようだ。私はこの女性  
批評をする側の立場というものをクローズアップして考えてみた  
い。「雨夜の品定め」は、源氏は時たま口をはさむくらいで、傍  
観者的立場をとり、頭中将、左馬頭、藤式部丞の三人によってほ  
とんどがなされる。したがってこの三人の人々の立場が大きく反  
映していると言える。

頭中将は葵の上の兄である。左大臣家の人である。先にも述べ  
たように、源氏が葵の上のもとにあまり訪れないことを気がかり  
に思っているはずである。一夫多妻の時代であるから、源氏が多

くの女性と関係があるのは容認できるとしても、それは自分の妹  
の正妻を特別に大事に待遇しての話であって、正妻をなおざりに  
して、他の女性たちに血道を上げているのは許せない。しかし、  
直接源氏に自分の妹のことをもう少し念頭にかけてほしいと言う  
ことはできない。そこで「雨夜の品定め」という女性批評の機会  
には、暗にそういったことを仄めかそうと考えるのが当然だろう。  
左馬頭及び藤式部丞の立場を考えてみよう。彼らはいくら自由  
に話せる立場にあつて女性批評をするにしても、源氏の正妻葵の  
上の兄である頭中将のいる前で、源氏が他の女性に対して関心を  
もつようになる話をするのはなるべく慎まなければならない。ま  
して源氏と葵の上の仲が良好の状態にない時はなおさらである。  
それに頭中将の父は今をときめく権勢の左大臣である。その機嫌  
を損じたら自分たちの栄達にも影響する。自然彼らのする女性批  
評は、源氏に葵の上を見直させるような話になっていくはずであ  
る。

以上に述べたように源氏と葵の上の仲がしっくりいってないと  
いう状況、そしてそれと無関係ではない頭中将たちの立場を考え  
合わせる時、「雨夜の品定め」が、源氏と葵の上の関係を意識し  
てなされているということは否定できないものになると思う。そ  
してそういった観点から「雨夜の品定め」を見ていくと、いくつ  
もそういった点を感じさせるものがある。それについて次に述べ  
ていくことにしたい。

「雨夜の品定め」が純粋な女性批評ではないことは従来言われ  
ていることであり、それは源氏をして中の品の女性と接触させる

ためにそういった点があるとも言われている。事実、源氏はこれがあることよって中の品の女性に興味をもつことにはなった。しかし、頭中将や左馬頭の語り口からすれば、源氏が中の品の女性に興味をもつように仕向けているところはほとんどないのではないかと思う。頭中将の場合、

人の品たかく生まれぬれば、人にもてかしづかれて、隠るること多く、自然にそのけはひこよなるべし、中の品になん、人の心々おのがじしの立てたるおもむきも見えて、分かるべきことかたがた多かるべき。下のきざみといふ際になれば、ことに耳立たずかし

(134べ)

と言っているように、中の品の女性については、はっきり優劣の区別がつくという事で関心を示しているにすぎない。特に源氏に中の品の女性を推賞しているわけではない。左馬頭の場合で

さて世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならん人の閉ぢられたらんこそ限りなくめづらしくはおぼえめ、いかで、はたかかりけむと、思ふより違へることなん、あやしく心とまるわざなる。父の年老いものむつかしげにふとりすぎ、兄の顔にくげに、思ひやりことなることなき闇の内に、いといたく思ひあがり、はかなくし出でたることわざもゆゑなからず見えたらむ、片かどにても、いかに思ひの外にをかしからざらむ。すぐれて瑕なき方の選びにこそ及ばざらめ、さる方にて捨てがたきものを

(136—137べ)

と言っているように、意外性の面白さという点から中の品の女性を評価しているのであって、特に上の品の女性よりも優れていると言っているのではない。頭中将も左馬頭も、源氏に中の品の女性を認識させているが、特に中の品という階級の女性ということを重ねているのではなかった。しかし、中の品の女性を知らない源氏にはそれが強い興味の的となった。

頭中将たちは、源氏が中の品の女性に興味をもち始めたのとは裏腹に、むしろ源氏の女性に対する興味を抑制する方向に向かっているように思われる。頭中将のことばには、

女の、これはしもと難つくまじきはかたくもあるかなと、やうやうなむ見たまへ知る。ただうはべばかりの情に手走り書き、をりふしの答へ心得てうちしなどはかりは、随分によろしきも多かりと見たまふれど、そも、まことに取り出でん選びに、かならず漏るまじきはいとかたしや。

(132べ)

というものがあつたり、左馬頭が指喰いの女の話をした後に、はかなき花紅葉といふも、をりふしの色あひつきなくはかばかしからぬは、露のはえなく消えぬるわざなり。さあるによりかたき世とは定めかねたるぞや

(133べ)

とあつたり、あるいはまた、夕顔の話の後に、

世の中や、ただかくこそとりどりに、比べ苦しかるべき。このさまさまのよきかぎりをとりに具し、難ずべきくさはひまぜぬ人は、いづこにかはあらむ。吉祥天女を思ひかけむとすれば、法氣つき、霊しからむこそ、またわびしかりぬべけれ

(160べ)

とある。左馬頭も、

おほかたの世につけてみるには咎なきも、わがものとうち頼むべきを選らんに、多かる中にもえなん思ひ定むまじかりける。  
(137ペ)

と述べている。どれも妻として完全で理想的な女性を得ることの困難さを言っている。頭中将は「雨夜の品定め」の中で三回もそのことを繰り返して言っている。しかし、考えてみるとこれは当然なことである。こう何度も繰り返して言う必要があるのだろうか。みんな百も承知のはずである。ただ単にこういう完全な女性がいけないという意味だけだったら、くどすぎて、物語の方法として見た場合、得策とは言えないだろう。やはり、作者がそういうことを語らせることには、別の意図があったと考えた方がよいのではないかと思う。それは、恋愛遍歴をして完全な女性を求め歩く源氏にその無駄を論し、葵の上のところへ完全に戻るように仕向けようとする頭中将たちの意識があるということなのではないだろうか。

当の源氏はどうかというと、藤壺の宮に理想の女性像を見出だしているのに、頭中将たちのことばを真剣に受けとめようとはしていない。それについてある程度まで考えるようになったのは「若菜下」になってからである。

多くはあらねど、人のありさまの、とりどりに口惜しくはあらぬを見知りゆくまに、まことの心ばせおいらかに落ちたるこそ、いと難きわざなりけれとなむ思ひはてにたる。

(199—200ペ)

と自ら言っている。源氏は「雨夜の品定め」から三十年たってやっとそういう心境になる。

### 三

「雨夜の品定め」には、これまで述べてきたような、頭中将たちの、源氏が女性に対して消極的になるように仕向けることばがあると同時に、葵の上を評価するようなことばがある。二重の構えである。頭中将が、

さし当りて、をかしともあはれとも心に入らむ人の、頼もしげなき疑ひあらむこそ大事なるべけれ、わが心あやまちなくて、見過ぐさば、さし直してもなか見ざらむ、とおぼえたれど、それさしもあらじ。ともかくも、違ふべきふしあらむを、のどやかに見しのばむよりほかに、ますことあるまじかりけり  
(144ペ)

と述べるところがある。これは後に、

わが妹の姫君は、この定めにかなひたまへりと思えば、君のうちねぶりて、言葉まぜたまはぬを、さうさうしく心やましと思ふ。  
(144—145ペ)

と語られているように、葵の上にとって都合のよい女性論であることは間違いない。頭中将は、いくら女の方が努力をしても、男がそれに応えてくれないこともある、仲違いしそうな場合も、女としては気長に我慢していくしかないのだと言っている。いささか自虐的な考え方であるが、そこには源氏に対する皮肉も含まれている。源氏に葵の上のことをもっと考えてもらいたいと思う気

れる。源氏の「うちねぶりて、言葉まぜたまはぬ」ゆえんである。

ほかにも左馬頭の女性評で葵の上にとって都合のよい内容のものとして、

かならずしもわが思ふにかなはねど、見そめつる契りばかりを捨てがたく思ひとまる人はものまめやかなりと見え、さてたもたる女のためも、心にくく推しはからるなり。

(138 べ)

常はすこしそばそばしく、心づきなき人の、をりふしにつけて出でばえするやうもありかし

(141 べ)

今はただ品にもよらじ、容貌をばさらにも言はじ、いと口惜しくねぢけがましきおぼえだになくは、ただひとへにものまめやかに、静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼みどころには思ひおくべかりける。あまりのゆゑよし心ばせうち添へたらむをばよろこびに思ひ、すこし後れたる方あらむをもあながちに求め加えじ。うしろやすくのどけきところだに強くは、うはべの情はおのづからもてつけつべきわざをや。

(141 べ)

といったものがある。葵の上という女性は、気位が高く、うるわしいということで、特に欠点はないが、源氏にとってはうちとけにくく、物足りない存在であった。そういった点があるのを承知して、左馬頭は源氏に忍耐と譲歩を強いるとともに、葵の上の美点を誇張しているように思われる。源氏は左馬頭のことばをある程度納得したようだ。「雨夜の品定め」の翌日左大臣の家を訪れ

持が汲取る。葵の上に逢い、

人のけはひも、けざやかに気高く、乱れたるところまじらず、なほこれこそは、かの人々の捨てがたくとり出でしめめ人には頼まれぬべけれ、と思すものから、あまりうるはしき御ありさまのとけがたく、恥づかしげに思ひしづまりたまへるをさうざうしくて……

(167 べ)

と思うところがある。一度は葵の上を見直してみようと思ったが、実際に逢ってみると、その欠点がどうしても我慢できないといったところである。もっともここで源氏が葵の上に満足してしまつたら次の物語の展開は貧弱なものになってしまう。作者としてはそういったことを望まなかつたのだろう。

「雨夜の品定め」の中では、頭中将たちの四つの経験談が語られる。指喰いの女の話、浮気な女の話、夕顔の話、博士の娘の話である。指喰いの女の話は左馬頭の経験談であり、そこでは、

はやう、まだいと下臈にはべりし時、あはれと思ふ人はべりき。聞こえさせつるやうに容貌などいとはほにもはべらざりしかば、若きほどのすき心には、この人をとまりにともし思ひとどめはべらず、よるべとは思ひながら、さうざうしくて、とかく紛れはべりしを、もの怨じをいたくしはべりしかば、心づきなく、いとかからで、おいらかならましかばと思ひつつ、あまりいとゆるしなく疑ひはべりしもうるさくて、かく数ならぬ身を見もはなたで、などかくしも思ふらむと、心苦しきををりはべりて、自然に心をさめらるるやうになんはべりし。

(147—148 べ)

と語られていたり、左馬頭と女がいさかいを起こした後のくだりで、

さりとも絶えて思ひ放つやうはあらじと思うたまへて、とかく言ひはべりしを、背きもせず、尋ねまどはさむとも隠れ忍びず、かかやかしからず答へつつ、ただ、『ありしながらはえなん見過ぐすまじき。あらためてのどかに思ひならばなんあひ見るべき』など言ひしを、さりともえ思ひ離れじと思ひたまへしかば、しばし懲らさむの心にて、『しかあらためむ』とも言はず、いたくつなぎきて見せしあひだに、いといたく思ひ嘆きてはかなくなりにはべりにしかば、戯れにくなくむおぼえはべりし。

(152ペ)

というところがある。特に傍線を引いた部分に注目して見ると分かると思うが、源氏と葵の上との關係を意識して語っているように思われる。「若きほどのすき心には、この人をとまりにともしひとどめはべらず……」と言っているのは、源氏の心を付度してのことばである。左馬頭と指喰いの女の物語は、結局、男が女の心をじらし意地を張っているうちに、女はそれがもとで死んでしまった話である。こういったことは源氏と葵の上の間にも起こりうる。左馬頭はそれを言いたいのである。他にも女性關係の話は多くあるはずなのに、あえてこの話をもち出したのはそういった意図があったからなのだろう。そして、源氏と葵の上の關係が少しでも好転することを望んでいるのだと思う。

左馬頭は次に経験談として、指喰いの女と比較される浮気な女の話をする。これは、話の後に左馬頭が、

御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなんと見ゆる玉笹の上の霞などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそをかしく思さるらめ、いまさりとも七年あまりがほどに思し知りへばなん。なにがしがいやしき諫めにて、すきたわめらむ女に心おかせたまへ。あやまちして見む人のかたくななる名をも立てつべきものなり

(156ペ)

という源氏への忠告をするところがあるが、その忠告の題材である「すきたわめらむ女」の例として語られている。これも単に年長者の若者に対しての忠告、訓戒としての意味だけでなく、源氏の女性遍歴に歯止めをかけて、源氏と葵の上の關係をよくしようとする意識が裏にあると考えることもできると思う。

左馬頭の話に触発されて頭中将は自分の経験談として夕顔の話をする。そこでは、

(夕顔は)涙を漏らし落しても、いと恥づかしくつつましげに紛らはし隠して、つらきをも思ひ知りけりと見えむはわりなく苦しきものと思ひたりしかば、心やすくて、またとだえおきはべりしほどに、跡もなくこそかき消ちて失せにしか。

まだ世にあらば、はかなき世にぞさすらふらん。あはれと思ひしほどに、わづらはしげに思ひまづはす気色見えまししかば、かくもあくがらさざらまし。こよなきとだえおかず、さるものにしなして、長く見るやうもはべりなまし。(159ペ)

と語られていることが注目される。女が内気で、思ったことをはつきり言う性格ではないことに油断して、長く女の家を訪れなかつたために女が失踪してしまうという憂き目にあった話である。

指喰いの女の話と若干類似している。相手がうるさいほどに、慕ってつきまとう様子があつたら、行く方知れずにさせることはなく、ひどく無沙汰することもなく、いつまでも連れ添う方法もあっただろうと今更ながら後悔している。頭中将もまた、この夕顔の話をすることによって、源氏に、葵の上のもとに長く訪れないでいるとこれと似たことが起きる可能性があることを仄めかしているようだ。

藤式部丞の語る博士の娘の話は特に源氏への戒めの意図があるように思われない。藤式部丞は女性批評の場に源氏同様それほどとけ込んでいない。ほとんどは左馬頭と頭中将によって女性批評がなされる。

四つの経験談を通して分かるのは、どれをとってもそれほど魅力的な話はないということである。男の側から見た場合、みな失敗談にすぎない。通常の女性経験の話だったらもっと魅力的な興味を呼ぶ話が出てきてよいのではないだろうか。そうならないのは語り手に特別な意図があつたからだと思う。何度も述べてきたことだが、源氏の恋愛遍歴に歯止めをかけて葵の上のところへ戻そうという意図が。魅力的な話をもしたならば、ますます源氏は他の女性に興味をもつようになり、葵の上との間にはなお一層の距離が生じてしまうのである。どうしても源氏に対して女性問題についての戒めを与えるような話をしなければならぬ。おのずと魅力的ではない自分たちの失敗談の話になっていくのである。頭中将と左馬頭の経験談は、源氏に葵の上との関係においてこれから存在する可能性のある不幸を暗示し、危機感を与えるの

に成功しているように思われる。

#### 四

「雨夜の品定め」は理想の妻として実直で誠実な女性を推奨している。それが葵の上を評価することになっている。年長者が年下の者に説く女性批評であれば、一般論として教訓性をおびるのがある程度当然であり、理想的な妻としては自然に実直で誠実な女性を薦めることにもなる。だから頭中将たちがそういった女性を称揚したからといって、それは必ずしも葵の上を慕った結果ではないと考えられるかも知れない。今まで論じてきたことも都合のよい例を都合よく解釈してきたにすぎないと思われるかも知れない。だがそうではない。たしかに理想的な妻ということの問題にすれば、実直で誠実な女性を推すのが当然かも知れない。しかし、源氏には葵の上というれっきとした正妻がいる。その源氏に理想的な妻としての資格を説くということ自体不自然である。また、その資格を説くにしても、それが葵の上と一致しなかつたら事は穏便にはすまない。どうしても葵の上にとって都合のよいことを言わざるを得なくなる。頭中将がいるのではなおさらである。それなのにあえてそういった話にもっていくことは、はじめから葵の上を評価するような話をしようとする意図があつたからに外ならない。そういった意図がなかったら、正妻論とは別の方向に話を向けていくか、話をそこまで発展させないですますこともできたと思う。葵の上が正妻でありながら、源氏から眞の正妻としての待遇はされていないという状況があるから、ここで

葵の上に有利な正妻論を語る意味があるのだろう。

結局、「雨夜の品定め」では、頭中将も左馬頭も自然な女性批評を行なっているのではなく、悪く言えばお互いに共謀して源氏を葵の上のところへひき戻すことを主たる目的にして女性批評を行なっているのだとも考えたくなる。こういった頭中将たちの目論見とは裏腹に、「雨夜の品定め」は源氏にとって中の品の女性に対しての関心を強めるものとなり、また、「雨夜の品定め」の終わりに、

君は人ひとりの御ありさまを、心の中に思ひつづけたまふ。

これに、足らずまたさし過ぎたることなくものしたまひけるかなと、ありがたきにも、いとど胸ふたがる。(166—167べ)とあるように、藤壺の宮の理想性を再確認するものとなっている。皮肉な設定と言うべきであろう。

「雨夜の品定め」を設定するにあたって、作者としては源氏と中の品の女性を結びつける目的があったろうが、それをそのままの形でもち出してはいない。むしろそれは逆な源氏の女性関係に歯止めをかけるような形をとらせ、それとアイロニカルな関係をもって、源氏の中の品の女性への強い興味が導き出されてくるという構造をもたせているように思われる。

以上、「雨夜の品定め」には、従来言われてきたこと以外に源氏と葵の上との夫婦仲を改善しようとする意識も多分に見ること

ができるということについて、大別して、

○女性批評をする人々の立場が葵の上を鼻息しなければならぬ位置にあること

○源氏が他の女性に興味をもつ方向にはあまり話を進めていないこと

○源氏が葵の上を評価するのに都合のよいことが語られていること

○源氏の正妻として葵の上がいるのに、あえて本来なら必要な正妻論を語っていること

といった四点から立証してきた。「雨夜の品定め」はほかにも作者の女性観その他諸々の問題が絡んできて、単純に割切れるものではないが、こういったことも一つの解釈の可能性として提出することができると思うのである。大方の御批判を仰ぎたい。

注(1) 『花鳥余情』、阿部秋生氏『源氏物語研究序説』(東大出版会、昭34)

(2) 藤井貞和氏「雨夜のしな定めから蟹の巻の『物語論』へ」(『共立女子短大(文化)紀要』18、昭49)

(3) 森一郎氏が『源氏物語の方法』(桜楓社、昭44)でほぼこれと同様のことを述べておられる。

(4) 大朝雄二氏が『源氏物語正篇の研究』(桜楓社、昭50)で既にこのことを指摘しておられる。